

毎日新聞 2020年9月30日 「みんなの広場」への投稿掲載

(令和2年度入学) 高校1年(六か年コース) C組 山先直紘 君

私の祖父はまもなく83歳になる。まだまだ元気な様子だが、数年前に体調を崩したことがあり、時々心配にもなる。

私をよくかわいがってくれ、これまでよく話をしてくれた祖父。その話の中に1946年8月6日の広島への原爆投下がある。当時、祖父は広島市の爆心地から二十数キロ離れた能美島に住んでいた。そこで閃光を見た。熱い爆風も受けたという。爆風は人を転ばせ、雪見障子のガラスを割った。その威力を聞き、私は原爆の恐ろしさを感じた。

終戦から75年。私の同級生には身近な人から戦争体験を聞いたことがない者も多いだろう。戦争体験者の生の声を聞こうにも、時の経過とともにそれを話せる人が減っている。

戦後、平和が長く続いてきたことは素晴らしいことだ。だが、この平和を維持するためには、祖父が体験したようなことが再び起こらないように、戦争の惨禍を語り継ぐ方法を考えなければならないと思う。時間は待ってくれない。